

18 . 何故空は高いのか (カリंगा)

あなたは、背伸びして、空に手を着いたら、どんな感触なのか、考えたことはありませんか。そうですね、世界のはじめ、カリंगाの人びとは、空というのは地上に近く垂れ下がっていて、人びとの頭は、ほとんど空に触れるようだ、と信じていました。

彼らには、空は彼らの頭上にある青い天井のようでした。昼間は、彼らは背伸びして、ふわふわした、白い雲を触れて、夜には、背伸びして、輝く星たちを触れました。これは、カリंगाの人びとを、非常に特別だと感じさせました。

古代カリंगाの人々は、宇宙のすべてのものは、魂と感情を持っている、ということも信じていました。たとえば、人や植物や動物などの生きただけでなく、生気のないもの、たとえば、海の岩とか地面などにも。すべてのものは、完全に調和し、共存していたのです。

しかし、ある日、地上への空の近さが、永遠に変わりました。そしてそれは、ある男のわがままな貪欲と、ある女の怒りの感情によったのです。

森の中で、食べ物を得るための狩猟が、長く、しかしあまり収穫がなかった日、男はついに、彼の背に小さな死んだ鹿を背負って、彼の素朴な家の彼の素朴な妻の所に帰ってきました。彼はその鹿を台所のテーブルの上に下ろして、妻に言いました。「妻よ、皮をはぎ、この動物をさばいて、夕食を作ってくれ。」

彼の妻は、その小さな生き物を見て、彼女の夫は、こんなやせこけた動物を食べるために持ち帰って困らせようとしている、と思って驚きました。「しかし、あなた。」彼女は言いました。「この鹿は、ネズミくらいの大きさです。どうやって私たちふたりの食事にすることができますか。犬の餌にもなりません。」

「私に口答えするな、婦人よ。」いらだっている夫が言いました。「私は一日中長く厳しい狩猟をして、私が手に入れたのはこの動物だけだ。私の言うとおりにしなさい。鹿を準備し、調理ができたら、わたしたちは公平に分けよう。」

妻は肩をすくめ、夫の言うようにしました。彼女は痩せこけた動物の皮をはぎ、肉を用意して、それを彼女と彼女の夫のために調理しました。

外では、空は妻のストーブの上で調理されているおいしい肉の香りがして、よだれがたれそうな香りを味わうために、地上に近づいて来ました。

小さな鹿を調理するには、短い時間ですんで、餓死しそうな夫の前のテーブルに、妻は調理した生き物を出しました。食卓に夫と一緒に着く前に、おいしい肉の味に気をもみながら、彼女は料理の道具を片付けました。しかし、彼女が、調理した鹿が載った大皿を見ると、彼女が信じられないくらい驚いたことには、夫は動物を全部食べて、皿には、鹿のきれいな白い骨が残っているだけでした。

「このわがままの、大飯食らい。」彼女は夫を叱りました。「私は苦勞して皮をとり、鹿をさばいて調理し、あなたは、自分だけで全部食べたんですね。」

夫は、口の端から肉汁の滴りを拭いて、「げっぷ」をしました。肉は本当においしく、しかし、食べてしまったので、貪欲に食べてしまったことに罪責感を感じ始めていました。怒って、泣きそうになっている妻を見ました。「申し訳ない。」と彼は言い、「しかし、あなたが食べるために、骨を残しておいたよ。」と加えました。

妻は大皿の上にある、小さな白い骨を見ました。「骨？骨のどこがいいのよ。」彼女は泣きました。

「骨の亀裂を開くんだ。」と夫が説明しました。「そして、中の骨髄を食べるんだ。そこは、肉と同じくらいおいしいはずだ。」

妻は骨髄が、鹿の肉ほどおいしくないことは知っていましたが、苦しい空腹を満たすために、他に方法もないので、夫の指図に従うことにしました。

妻は小さな鹿の骨を外に持って行き、地面に置いて、大きな石を使って、その骨を砕いて開くために、やってみましたが、うまくいきませんでした。

「そうやるんじゃない。」妻の哀れな試みを見ていた夫は叫びました。「骨を岩の上に置いて、木の切れ端で砕くんだ。」

いらだっている妻は夫の忠告に従って、小さな骨を岩の上に置きました。そして、木片を取り上げて、彼女の頭上に持ち上げて、骨を叩こうとしました。しかし、木片が彼女の上の空を叩いて、骨を強く叩く力を止めてしまいました。そこで、彼女は空に、上へ移動し、離れて、彼女が木片を振り回せる場所を与えてくれるように頼みました。

## フィリピンの神話と伝説

空は女性の願いに応じて、少し上に移動しました。しかし、それは十分ではありませんでした。そして、いらだっている空腹な妻は、まだ骨を砕いて開く場所を確保できませんでした。

妻は空腹になり、いらだっているのです。彼女は空に怒り、彼女にできるだけ大声で叫びました。「空よ、できるだけ私から離れて、私があなたに触れないようにしなさい。」

空は驚いて、妻の怒りに負けて、上の方へ、そして遠くに動いてゆきました。

ついに妻は彼女の頭上に高く木片を持ち上げることができました。彼女のすべての力を使って、小さな、白い鹿の骨を砕くようにそれを振り下ろしました。婦人の一撃の力によって、それは砕かれて開きました。しかし、骨は大変小さいので、骨髓は何も入っていませんでした。

妻は頭を抱えてうなだれ、すすり泣きました。そして、彼女は怒って空に向かって言ったことに気付きました。彼女は空を見上げて、赦しを請いました。しかし、それは遅すぎました。妻の怒りと不親切な言葉によって、空は高く上がって行き、もはや触れることができなくなったのです。

その日から、空は届くことも、触れることもできない所に留まっています。それは人びとから離れて、もし、また地上近くに帰ってきたら、また誰かの怒りと不親切な言葉によってやっつけられるのではないかと、恐れているのです。